

念は花を咲かす

2024年7月12日第9号

西南中生徒指導部通信

文責 松浦

凡事徹底

西南中の学校教育目標を「存じでしょうか？令和六年度も昨年度から引き続き、『主体性と協働性を育み、夢の実現に挑戦する生徒の育成』『凡事徹底』、そして「自己への挑戦」、「他への貢献」です。職員はもちろん、生徒の間では「凡事徹底」「自己への挑戦」「他への貢献」は合言葉になるほど、すっかり浸透しています。

「凡事徹底」を生徒指導面で具現化すると「爽」「研」「美」をスローガンとする一つひとつの行動です。先取り笑顔で挨拶をする、8時正門通過、授業2分前着席、無言掃除、整理整頓、端正・清潔な身だしなみ等々…、毎日これらのことを意識して生活しています。ではなぜ、「凡事徹底」して、細部にこだわることなのか。それは、「すさみ(荒み)を除去する」ためです。

目にする心が荒んでいくようなものを、生徒たちと一緒に除いていこうとする想いが凡事徹底に込められています。今回は、この「荒み除去」についてお話しさせていただきます。

一九二八年、アメリカの刑事司法学者であるジエームズ・ウィルソンとジョージ・ケリング両氏によって提唱された「割れ窓理論」というものがあります。簡単に言うと、どうしたら集団が「健全」になっていくか、という理論です。

アメリカのスラム街に窓の割れていない車を放置しても、一週間後はそのままなのに、窓に少しヒビが入った車を放置すると、一週間後には窓が全て割られ、中の物は全部取られ、車体がボロボロにされていた…という検証結果が出ました。ヒビが少しでも入っていると、それを見た人は、

「他の人もやっているから、別にいいだろう、自分もいいだろう」と罪の意識が低下したり、なくなったりすることです。

その理論を取り入れたのがニューヨークのジュリアーノ元市長でした。当時のニューヨークは治安が非常に悪く、殺人・強盗・強姦

等、重大犯罪が日常茶飯事でした。普通ならば、警察を増員し、治安回復を、と手を打ちそうですが、市長は当時顧問のケリング氏の助言に従い、「割れ窓理論」を実践しました。「小さなヒビ」である、人が見向きもしなかった軽犯罪取り締まりを強化したり、環境美化に命がけで取り組んだりしたのでした。

それまで勝手に放題だった「地下鉄の落書き」を一切消し、「無賃乗車」と一緒に厳しく取り締まりました。また、信号待ちの車の窓を勝手に拭いて小遣いをせびる子供たちも厳しく取り締まりました。アメリカの重大犯罪からすると、どれも小さなことですから、「これぐらいいいだろう、仕方ない」と放置されていました。

しかし、こうした「小さな荒み」「そ」「ヒビ」の入った窓なのです。小さな荒みを放っておくと、「大きな荒み」つまり大きな犯罪を生み出してしまふことにつながっていくのです。

これが学校という集団でも同じです。そのような環境にいると、心の器も下向きになり、心の荒みが増大する悪循環になります。ちなみに、小さな荒みを徹底的に排除したニューヨークの効果は抜群でした。ジュリアーノ元市長時代、治安は劇的によくなり、重犯罪率を五七%も減らし、女性が夜でも安心して一人で歩ける街になりました。

本日、北合志警察署から来ていただき、スマートフォン(特にSNSの使い方)や薬物乱用防止についてお話していただきました。「これぐらいの投稿なら問題ないだろう。」「ちよつとぐらいなら薬物を使っても大丈夫だろう。」という小さな荒みから、重大な犯罪を起してしまうことにつながっていることでした。

SNSを「閉ざされた世界」のように感じ、人前だったらしないのに、誤った行動をしてしまい、それが相手を傷つけたり、他人に迷惑をかけたといったことにつながっていくのです。

挨拶、時間、掃除、どれも当たり前のことを当たり前に行っている(凡事徹底)と本気で思い、本腰で取り組むことが、身の回りから心が荒む要因を取り除くこととなります。本気、本腰になれば、私たちはきっと本物(自分のもの)になるのです。

参考文献

「カリスマ教師の心づくり塾」

原田隆史